

意味の定義が充たすべき要件

伊 東 只 正

安井稔先生が呈示なさった「意味の好ましい定義の条件」(『英語学大系』第5巻,『意味論』安井稔他著,大修館刊,1983の第2章「語の意味論」(安井稔担当),pp.28-32)について長いこと色々考えてきましたが,この条件の充足はこう考えても可能ではないかという案に近年ようやく辿りつきました。本誌20周年記念号に投稿をと,老生にまでお声がかかったのを,これ幸いとばかり早速お受けする気になったのは,言語と意味の関係に自分なりのまとまりをつけるよい機会だと独り決めしたからです。今のところまだ独断の域を出ていない考えを論文の体裁も整えない書き流しのまま,臆面もなくお目を汚しますが,書いた限りの事柄にはどんな疑義にもお答えできるつもりです。諸賢のご意見を誘発するキッカケともなれば,何よりも嬉しいことです。

本稿では「構造,機能,型,形」を次のように関連づけて用います。構造は,その構成要素間に一定の相互関係を擁する統一体で,要素の差替えが利きます。要素間の関係を機能(型)とし,その担い手を素材(形)と呼ぶことにします。統語構造から音素まで,言語構造に押しなべてこの2側面の対立と依存の緊張関係が認められます。形は通例形態と呼ばれていますが,型とともに統一体として振舞うとき,「形式」と呼ばれ,形態とは区別されます。

本稿は,意味もまた2面性を具備した形式として意味の世界を築いているとの見解を,安井先生の5条件のテストにかけることを最終目的としますが,議論の段取りとして,次の順序をとらせて頂きます。

1. 言語形式の成り立ち
2. 意味形式の成り立ち
3. 「好ましい定義の条件」について

1.1. 構造型の2種 上記の意味での構造型は「閉じた」型,「開いた」型の

2種に大別されます。前者は、同じ位置で差替えられる要素は指定された条件を満たすものに限られますが、後者における要素の差替えにはこうした制約がありません。もちろん、こうした制約が皆無なところに構造の成立などありえませんが、両者の別はいわば両極端であって、言語構造の場合、大半は両極の中間にあって、どちらかの極に傾きつつ平衡を保っています。ですから、構造のより基本的な区分は、この平衡を全体の見地から見極める使い手の存在が構造の成り立ちにとって不可欠なケースと、構成要素間の相互作用から機械的・自動的に構造が成り立つケース、との別に求められることになります。本来前者に属する言語構造の型を前者に擬したところに、従来あらずもがなの問題への素直な解答を阻んできた要因があったようです。

次の4行はルイス・キャロルの『鏡の国のアリス』からの引用ですが、斜体部を占めている語が、英単語だということにとどまらず、特別な語類に属すること、他の諸語の身許が不明なのに、大小の構造の所在がほとんど自明と言えるほどなのは、斜体部の諸語の配置に負うところが多いこと、にご注目下さい。

'Twas brillig and the slithy toves

Did gyre and gimble in the wabe;

All mimsy were the borogoves,

And the mome raths outgrabe.

上に特別な語類との表現を用いたのは、言うまでもなく、下線を施した位置を占める位置類は①他の位置に用いられることの少ない、②反面、使用頻度が極めて高く、③成員数がごく少なく新現の加入を容易に認めない類であり、それだけに位置の標識としての信頼度はごく高いからです。こうした閉じた語類が構造の枠組をしっかりと支えていればこそ、NP、VP、AP、AdPなどが開いた構造として存分に活躍する余地が開けるわけです。

語形成の段階でも活用語尾の-sや派生接辞の-yなど組合う相手が決まっていることが構造の認知を手堅く助けています。接尾辞は一般に文法関係の表示とともにいわゆるレキシカルな意味の伝達を兼ねていますが、'-y'など後者の役割は求めるに由なく、活用接辞の人称、時間、数といった意味合いさえ、文法面での重みに比べれば情報面の価値は一般に副次的にとどまると見るのが妥当でしょう。但し接頭辞には、レキシカルな意味を保持しているものが多いことが、興味をひきます。

しかし構造の所在がこれら諸要素とその配置に「還元」できると考えるのは誤りです。早い話、上掲詩の3行目は'AP be NP'の語順ですが、これは恐ら

く主部：述部のしつらえであって、倒置ではないようです。この NP の活用形が 'be' のそれと呼応の関係にあるからといって主部の位置に止るとの主張はできないのです。早い話、'There is a book on the desk' の斜体部は、日本語では「本が」であって「本は」とはならない、述部の配置です。'the borogoves' も述部の位置への割当てが穏当とは言えないでしょうか。日本語の場合、「本は」が机の上にあります」において、「本は」は英語の主部の NP の意味に、「本が」は同じく述部の NP の意味に対応します。英語で、主部に置かれた NP は、述部を導入する役割と、述部の主要部の V と活用形の呼応関係表示の役割と、2 役兼ねていますが、導入役を免じられて述部に回されることも稀ではないどころか、かなり多いのです。前掲の例で言えば 'AP と言えばそれは NP' という形で、AP は NP の導入役となっているようです。

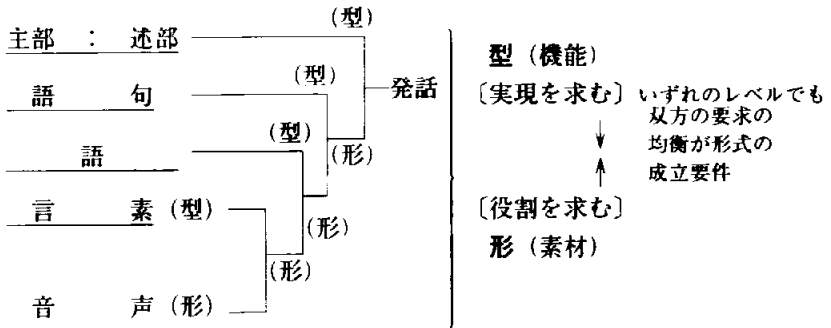
こんな次第で並べられている語句の文法的な役割を「最終的に」賦課するのは型の役割、というのは譬喩的な言い方で、実のところは言語の使い手の解釈に俟たなければならないので、機械的・自動的という訳にはいかないところに、「閉じた」型、「開いた」型の混成型の一大特徴が認められるわけです。

日本語の「-は」と「-が」の担う意味の相違も構造面での差違に根差しているのです。つまり、前者は、述部としての VP の外側にこれと対等の立場で相對峙していますが、「-が」は VP に帰属する、その主要部 V の従属要素です。（双方とも必須ではありません。）なぜこうした判断が下せるかといえは、

-は (-が・・・V) VP

において、①「-は」と V との間には雑多な要素が介在しうること、②両者の間に動作・状態とその主体という意味面での結びつきも、必ずしも必要とされていないこと、③この点「-が」がすぐ近くに現れる V と続ひついてしまい、「-は」のように遠い射程が利かないのと対照的なこと、などが、その理由として挙げられます。上の図式で「が」は「は」と入れ代わることができません。こう見てくると、英語の節構造とそれに見合う日本語の構造が、末節において大きく食い違いながら、大筋において、ピタリ一致していることに一驚させられます。いわゆる「主語」の NP すら、文の意味の核心として述部に組み込まれることが、間々あるのです。

1.2. 型と形の織りなす位置 前項に見た構造の 2 側面は、次の図に示すように、機能と素材の対が絡み合う形で最下位の音素と最上位の統語構造との間をつなげています。



☆位層を重ねるごとに型の統括力は強まっている。

☆各位層における形の個性と型の統括力との調和が、構造の全体に「多様の中の統一」の実を結ばせている。

☆統括力といい、調和といい、実は言語の使い手の所管なので、型・形・人、延いては意味・言語・人の三つ巴の相互作用をたえず視界から逸らせてはならない。

原素材から製品まで、小刻みに順を追った工程を眺めていること、これは単に言語形式だけに限られたことではなく、私たちが日夜働きかけている環境も同じ工程により整理され、秩序立てられているのではないかとの思いには禁じがたいものがあります。複雑さからいうと比べ物になりませんが、意味（事象間の関係）の成り立ちも同じ工程によるものではないでしょうか。

2

2.1. 人・型・形の三つ巴の一般性 この3者の協力関係は長い相互のつき合いのうちに今日に今日の姿にまでその緊密度を培ってきているわけで、人自体の感じ方、考え方さえ他の2者の存在に強い影響を受けていることは確かでしょう。更に意味のあり方にもその位層にも型と形の存在がハッキリと認められますし、言語形式との組み合わせも一対一の釘付けになっていないのは、相互の依存と対立のうちに均衡を見つけていくという方策が、有限の手段で無限の事態に対応していくための活路として愛用されているからに他なりません。人・言語・意味のトリオには「作られたものから作るものへ」の働きかけがさらに大きく強いと言えるでしょう。本稿で扱えるのはその一斑に止まりますが、複雑を極める現象や人事の根底にも本稿にいわゆる形式の成り立ちが原理的に認められる点が明らかにできたら、せめてものことです。

2.2 意味形式の型と形 手近なところで教員に例をとりましょう。細かく分類しだしたらきりがありませんが、学校という組織の中核に位置して、学生、事務職員、経営の主体とともに、一定の目的を達成するために独自の任務を担っている教員は、教員という機能の型と形としての人間の2面体と言えましょう。

この位置を占めるための外的条件、形に課せられた一定の要件がある点は閉じた類に似ていますが、これを伏せた異例の抜擢の余地が開けている点からすれば、これは開・閉の混成類であり、均衡を旨とする首脳陣の明敏な判断力がやはり不可欠なのです。

デンマークの王子ハムレットに課せられた任務（型）と生ま身の人間（形）の対立関係はどうでしょうか。父王の急死、叔父の即位、母親の彼との時を措かぬ再婚のうちに、叔父への容疑を固めながらも、王子としての体面を傷つけぬ、名誉ある復讐への方途に血を吐くような苦慮、懊悩を重ねる彼は、逸りに逸る武人としての熱血を抑止するにも大変な精力を割かねばならなかったのですが、大望達成の寸前、武人としての彼がこの抑制を撥ねのけ、あたら修羅場への口火を切つてわが身を滅ぼします。王国の頂点に立つものに課せられた責務（型）の自覚と、武人としての野性（形）の格闘は、適切な表現を求めて寢食を忘れる詩人の難行と一脈相通じるところがないでしょうか。

一般的に言って脚本家・配役・役者のトリオの関係は、才能のある個人が折々にその役割を変えてすぐれた作品の達成をめざしている点、言語を介した人間と意味の世界の交渉の理解に資するところが大きいように思われます。

意味の型と形の対立の関係にはこんな面も想起されます。ガソリンが入っていたドラムの空罐にタバコの吹殻を投げ込んで事故を起こした労働者のケースをある言語学者が報告していますが、型の名前に眼がくらんで形の実態に対する警戒心を怠った事が事故の原因でしょう。「クレタ島民は皆ウソつきと言う同島出身の名うてのウソつきの言は、真か偽か」という戯れ言が論理学の問題らしい体裁を保ったのは、ウソつきという型とこの型を適用される人間（形）との区別が不問に付される限りにおいてでしかありません。ウソで凝り固まった人間すら真実と無縁とは限らぬという真実が、ここでは「ウソつき」という色に塗りつぶされているのです。

アキレスがカメに追いつけないという逆理も、運動という型が距離と時間との関数であることを故意に伏せ、距離のみを問題にする限りにおいてのみ逆理たりうるので、これは詭弁というより、むしろ詐術でしょう。

以上のごく僅かな例からも、

- ①事象が事象として認知されるには、他の事象との関係において成り立つ型(a semantic field)のうちに位置づけられねばならぬ、
- ②事象の理解は型と形の両面にわたらねばならず、型としての理解は、事象から削ぎとられた一面の理解にすぎない。
- ③事象の型への参与は通例複数箇にわたる、
- ④事象も型も他の事象や型の間に所を得てのみ、意味をもつ存在たりうる、ことに、ご諒解を頂けると幸いです。

事象の形と事象の型と、私たちにとってどちらが把握しやすいかと言えば、まず個人差ということがありましようが、また後者は多分に意識下の沈黙の作業ということがあって一概に律しにくいのですが、感覚に訴える形がとかく一般化しにくいのに反し、機能・役割・関係のほうがむしろ把みやすいと言えます。

それも道理、ごく大まかに言って型は心理の世界、形は物理の世界に属しますが、後者に属する閉じた構造の知識を前者が創る開いた構造の拡大、増強に利用することはできても、後者を前者の仕組みに擬して固定化するのには生命の圧殺に他なりませんから、この行き方には強い反撥、というより拒否反応が働くのです。

自然の懐に抱かれてそこに安心立命を求める境地と、主導権は人間が握り、自然からは協力を求めるに止まる態度と、ここにも対極性が認められ、一旦後者に大きく傾いた人類は、前者の探るべきところにも気がつき始めたようですが、もちろん、徹底的な復古は不可能なので、両者の均衡が来るべき新世代の直面する大きな課題となりましよう。

海の幸、山の幸を、人工知能を羅針盤とする世界へとつなげる素材と機能の連鎖は、複雑さにおいて比較を許さないものの、音声と統語形式とをつなぐ連鎖と相通ずるものがあると見るのは、やはり偏見に類するでしょうか。

2.3. 言語形式と意味 しかし自然の閉じた構造の世界へと徐々に踏み込むにいたった契機は何だったのでしょうか。これは生活のすべての営みの指針が自らの身体のうち内蔵されている生物の世界から、自らの心が築いた意味の世界に指針を求めている現代の私たちの世界への岐路を択ぶようと、人間に誘いかけたのは何だったかということになりましよう。

純然たる憶測にすぎませんが、人間がこの第一歩を踏み出すずっと以前から、どんなに素朴な造りであろうと意味形式が織りなす関連網（以下NWと略称）

が大切なことへの自覚があったことは確かでしょう。しかし、この意味のNWを、身体に刻まれた記憶とはいえ、事象と対面しない限り蘇ってこない状態から、事象とは独立して随時念頭に想い浮かべられるようにするのに必要不可欠な利器、言語、にめぐり会えなかったら、人間は果たしてこの岐路を択べたでしょうか。意識下に埋もれた意味のNWを随時現前させ、不在の事象間の関連についてためつすがめつ槍討を加えることが、言語によれば可能なことに人間が気がつくまでに、どれほどの時間を要したことでしょう。しかし一旦このことが悟られるや、言語がまたたく間に人間の生活に極めて重要な位置を占めるに至ったことは容易に想像されることです。幼児による言語の習得にも同じ事情が認められないでしょうか。

このように言語が型と形との間を取持つ傾向が一般化すると、人間は型を設定してそれに見合う形の実現を目指すようになります。事象に従うというより事象を自らの意図する方向に導こうとする努力が始まるわけです。そのためには、いわば強固な妥当性をもった *virtuality* の構築が必要ですが、言語はよくこの要望に応えてきました。アインシュタインの一般相対性理論に採用されたリーマンの幾何学は '*created as a mere logical possibility*' だったそうです。これはまさに世界史的な意味をもつ劇的な一例ですが、私たち自身の生活を顧みても、形に引きずられて型が自然形成的に後を追うのでは退歩は免れず、形の実現をめざす型の設定により、血の巡りをたえず更新させるような生活を送りたいものです。

しかし言語形式の役割は、事象の2面間の均衡の取持ちに終始するものではなく、事象間の関連の客体化を本来の使命としています。関連となれば、これは一局部に限定されることなく、言語の使い手の人生経験の深浅にもよりますが、次から次へと関連の筋をたぐって行くのに原理上は何の支障もないはずです。俗に「一を聞いて十を知る」とか「目から鼻に抜ける」と言いますが、これは多少なり無意識のうちに誰もが日常実行していることではないでしょうか。ある1語の想起がヒントになって行悩んでいた問題の解答がスラスラと得られたという経験は、どなたにも身に覚えのあるところではないでしょうか。ヒントから芋づる式に掘り起こされ関連は決して単なる連想というだけのものではなく、私たちの経験に根を張るものです。私たちが重要な決定を下す際に信頼を託すのは、鮮明な連想ではなく、着実な関連なのです。

統語構造の型とは意味の面からすると、正に事象の関連の型（動作と目的、関係と軸、主節と述節など）なので、事象間の関連づけがさらに明確な形で規

定できます。加えて、本筋を呈示して細目の察知は受け手に任すことも、言語にはできます。「読み書きのほかに能のない男より、読み書きなどできない人間のほうがまだましだ」というとき、話し手の心はどこにあるのでしょうか。私たちの手許の意味のNWに照らして、「読み書きしか能のない男」「読み書きはできないが律義な男」の日常の行状の価値判断がここに表明されているととるより他に解釈の仕様があるでしょうか。

司馬遼太郎さんが「小説の発想をメモ用紙の何行かにまとめられないようなら、その発想はあきらめるにしかず」という意味のことをどこかに書いておられます。随分と大胆な断定ですが、その道の大家の恐らく信条と受取れます。その道理も窺えるように思われるので、一般的に言って意味は、扇のように末広がりになってはいるが、元締は要（かなめ）の1点であり、これが利いてないと、扇は扇の役をなさない。簡潔な判断と詳悉な細目とが切っても切れない筋でつながっていてこそ、巨篇は巨篇たりうるのだと教えられたことでした。意味は関連が身上であってこそ、このように伸縮自在でありうる、いや自在でなくては物の役に立ちうべくもない、と言えそうです。

書物の行間を読むという業も、言語には言い尽くしえぬ関連網を、ある時は扇の要に向かっ、時にはその末端に向けて、丹念に修復する努力ととれます。としたら、言語は単に関係項間の関係を客体化するにとどまらず、発信者の委託を受けた代理人よろしく、関連する意味のNWを代表していると考えるところはできないでしょうか。

しかしこの委託が発話なり文章なりの受け手に着実に伝わるには、それだけの手立てを整えなければなりません。私たちはある社会共同体の成員として共通的な意味のNWをもっていると想定するにしても、辞書に記載されているような意味が一体どこに由来するものか、手立ての考究はそこから始まります。

その前に言語の原素材である音声の原素材としての適性について考えておきましょう。

- 1) 入手が容易でしかも経費がかからない。
- 2) 細工が加えやすくしかも道具や設備を必要としない。
- 3) それ自体無意味、無価値で、組合う相手に与える影響が比較的少ない。

本来無意味な音声がどうして意味を担うにいたったかと言えば、やはり意味の寄託があったからだと考えるほかないでしょう。歴史的に見て、これまでに実績を挙げた寄託の積み重ねが現在に伝えられているわけです。そしてこの意味に振幅がある、ことに使用頻度の高さに対応するようにこの振幅が広がってい

る、のは、意味を固定化しようとの努力より、何らかの手立てによって状況に応じて必要な新規の意味を担わせようとの企図が成功してきたことを物語っています。ここで問題はこの手立てに戻りました。

この手立ての成り立つ第一の要件は意味のNWを基盤に相互に意思を通じ合おうとする言語の使い手間の合意でしょう。第二に、各語句の代表する意味の型、事象間の関連についての使い手間の合意が挙げられます。「信頼できる」とされる辞書ほど豊富な用例を描えているのは、この合意を確かめるのに先例が何よりの手掛かりとなるからです。また発話の場の脈絡 (context of situation) の重要性が強調されるのも、関係項の「項」よりも「関係」が重視されているからでしょう。

これらの合意が理想の域に達する道筋には多くの障害があるとは言え、誤解を惧れて先例を墨守していたのでは、言語の未来はおろか、明るい生活の見透しすら閉ざされてしまいそうです。事物と記号の間の1対1の対応関係の理想に向けての指示作用の洗練と、芽づる式の関連に基づく多目的的使用への馴致と、どちらも大切ながら、私たちの言語に対する基本姿勢は、どちらを主とし、従とすべきでしょうか。歴史の大勢はどちらに比重をかけた足跡を示しているのでしょうか。

2.4. 意味のNWと言語のシステムの親近性 意味・言語の両形式は同じ母親に育てられた兄弟なので似ているのは当然のこと、これまで見て来た通りですが、言及し損ねたことをここに摘記します。

- (1) 生活体であること 両者が三つ巴の当事者である人間からたえず活力の補給を受けて今日あるを得ているので、この生活体をたえず育成する責任が私たちにはある。
- (2) 関係が核心をなすこと この点につき言い添えておきたいのは、言語の活力の表出がメタファの形をとっていることだ。メタファーの原型は形状や印象の類似というより、ある形式の核となっている関係を別の事象に移転させるのを本領としている（「言語は生き物」などその1例）。「転石に苔むさず」など、転石とも苔とも何のゆかりもないところで、両者の関係にスポットが当てられ、人々を頷かせる活きた意味を伝えている。
- (3) 位層間に認められる差違 双方とも下位形式では同型に属する異形の数が少ないが、上位となるにつれ不規則な形を同化する型の力が強まる。家屋の建材は異なるごとに別の名がつくが、どんな材料を用いても、区別

が特に問題にならない限り、壁は壁、床は床ですんでいる。家屋ともなれば、素材面ではそれこそ多種多様である。言語形式については前述の通り。

- (4) 心から物への重心の移動の傾向 情緒が大勢を占める意味が、事象間の関係についての理解が深まり広まるにつれて、その理解に基づく意味の型へと重心を移しているが、この間の事情をサピアはこう論定している：

“Language, then, is what it is essentially, not because of its admirable expressive power but in spite of it.” 言語形式自体についても、意味する事象と同一視されていた時代から能率的に活用されるに至るまで、関係の理解に同様な深まりが認められる。一言で言えば、無知が想像や感情によって補われていた時代から理性と知識が舵を握る世界への成長である。

- (5) フィードバック受容れの余地 言語は伝達の利器としての要件を満たすには意味のNWの整備を何よりも必要とするが、これは個人個人の生活の安定にとっても大切な要件である。しかし個々別々の知恵よりも衆知を結集するに如かずであって、言語形式は共同体の成員間に交換されるにつれ、採長補短の成果が積もって洗練度を加える。再びサピアを引くと、“…it is in the actual give and take of social intercourse that it has been complicated and refined into the form in which is known today.” 閉じた構造においては、改造は出発点からの出直しを意味するが、開いた構造にあっては自己同一性を維持しつつフィードバックをこれの改造に活かしていける。

3

1～2節で意味の定義をどの方向に求むべきかについて考えてきましたが、定義には至りませんでした。安井先生の呈示しておられる「好ましい定義の条件」に照らして吟味できるのは、こうして得られた意味の概念にすぎないのですが、独り相撲の愚を曝らすことにならないよう充分に注意しつつ、先生の5箇条を1箇条ずつ引き、筆者の意味の概念の吟味の結果を記します。

- (1) 意味の定義は操作可能 (operational) なものであることが望ましい。

先生はこの操作について「一定の決められた方式に従ってある操作を繰り返すと、問題になっている語の意味が得られるとか、その定義に基づいて、次の段階の意味論へと考察を推し進めてゆくことができるというふうになっている

ものというほどの意味である」と説明なさっておられます。この種の定義は閉じた構造には可能でしょう——単位要素の規定とその組立ての規則に還元できるのですから。しかし、開いた構造は意味形式と言語形式の均衡、調和を、単に局所にとどまらず、延いては言語のシステム、意味のNWの全体に求めていかねばならないので、言語の使い手の存在が不可欠の一要因となります。こうした状況下では、先生のおっしゃるような操作は望むべくもありません。ただ、逃げ口上になりますが、言語のシステム、意味のNWの陣立てを言語の使い手に呈示し、その体験とつき合わせて合致するところ、首をかしげる個所の指摘を求める手順は、先生の操作を拡大解釈するときに包括される可能性はありうるでしょうか。

(2) 意味の定義は、同じものが異なる名前では呼ばれている現象を矛盾なく説明できるものでなくてはならない。

この条件に対する答えはすでに出了と思いますので、それ以上のつけ足しは控えます。唯、一言、蛇足になりますが、筆者の痛感するところを書き添えさせて下さい。「殺人犯人はあの酔漢」という等式は、両者が同一人物のとき、「言語の意味とは指示対象のこと」とする立場からは永遠のアポリアかもしれませんが、関係者からすると**重大な意味をもつ等式**なので、本稿で明らかにしようと努めているのも、この意味での「意味」のあり方です。両辺をつなぐ同一関係の確立こそ、この等式の意味の確定なのです。

(3) 意味の定義は固有名詞、普通名詞に対してはもちろん、抽象名詞、形容詞、副詞などにも適用できるものでなくてはならない。

名詞、動詞、形容詞、副詞にそれぞれ共通の意味は、それぞれの語類に属する語が統語構造内で占める特定の位置に由来するもので、事象にまつわる意味については、名詞に担わせると便利ということはあるにしても、名詞でなければ表せないといった制限はつけにくいのではないのでしょうか。事象自体に即して言えば、物（もの）と動き（こと）との区別さえ判然としていないのです。「身体」は、「心」は、「活動」でしょうか、「物」でしょうか。結局は語とし、どちらの扱いを受けているとしか言えないのではないのでしょうか。

少なくとも日本語、英語に関する限り、品詞は位置類なので、語形上の区別ができる場合はあっても副次的、補強的な意味をもつにすぎません。名詞の低位分類について、ブルームフィールドが、定・不定限定詞ないし「限定詞ゼロ」と単数形、複数形の組合せの可否による区分を試みっていますが、ここでも文法的意味（関係）が優先するのです。唯、注目すべきは固有名詞で、これは指示

作用を本務とする唯一の語類で（指示代名詞などを除けば）限定詞や複数形を排除します。普通名詞でもこの制約に服せば固有名詞並みの扱いを受けますが、逆に本来は固有名詞でも、指示された本人がさまざまな関係に巻込まれるにつれて、例えばジョンの履歴とか性格とかいう意味が重なります。名前が重んじられるというのもこの意味にからんでのことでしょうが、‘an Edison’とか、‘a boycott’のように普通名詞並みの意味を帯びることさえ稀ではありません。

(4) 意味の定義は、文法的形式語、すなわち前置詞、接続詞などをも考慮に入れたものでなくてはならない。

(3) 項の4大語類が開いた語類なのに対し、この項で名指されているのは閉じた語類です。1節に引いたルイス・キャロルの戯詩についていえば、その斜線部の語のうち、動詞を除いたすべてがここに一括された語類に属すると見てよいようです。同じ個所に記したように、閉じた類は構造認知の手掛かりとして大切な役割を果たしており、用いられる構造内の位置は限られています。使用頻度が押しなべて極めて高いために担う意味は複雑を極めます。しかし、その意味は、いくら複雑を極めるといっても、接続詞にせよ、前置詞、関係詞にせよ、関係という名で大きく束ねる3範囲内での関係項間の連結の多様性に止るので、形状や属性の類似を尺度とする類群の束ね方と、関係の類似を尺度とするそれとの間の格段の差違は疑えません。しかし両者の場合とも、主役が「関係」であることに変わりはないのです。

前項の4大語類に属する語と、この項の語類に属する語と、一方がある項目の担う関係の類似性を機縁として起用されることになるのに、他方は項目間の関係に焦点が合わされている点、後者の関係のほうがずっと抽象的ですが、両者ともそのカバーする領域の拡がり方が、主として、関係の類似に基づいている点は注目に値しないでしょうか。「幸便、手紙、葉書、肉筆、草稿」と、これらの語が現在使われている意味に使われ初めた項のことは、も早や常識として生きてはいないものの、意味の核心として直感的に伝わってくるのは、比喩的な関係といえると思います。ところが‘in, on, at’が時間面にも空間面にも流用されているとなると、「抽象度」の高低の差は歴然としています。しかし前者といえども、意味の成り立ちが関係を核としている点に変わりはないので、「教員」の意味の核心は関係と言われて、とっさに「成程」と言える人がどれほどいるか、筆者に自信はありませんが、ある構造内での関係項としての位置づけ、役割、機能、諸関連と詰めていけば、奇異感は恐らく消えるはず

(5) 語の意味に関する定義は、文の意味を求める際における基礎的作業として役立つものであることが望ましい。

閉じた型と開いた型のいわゆる構成型の構造においては、閉じた型の構造の基本単位（従来の実績）が「一応は」基本単位として認められますが、最終的決定は参加する構造の成り立ちが決まらないうちには下せません。問題の構造がどんな統語型を基底とするかに応じてこの基本型の単位の位置を占める要素に、最終的な基本単位、語、の資格が賦課されているのです。

どうしてこんな回りくどい手続が必要かと言えば、開いた構造において基本単位として機能する要素に課せられている構造的な制約は、原理的にいって無いからです。語の切れ端、例えば接辞が、他方では数語を連ねた複合語が、語との認定を受けうるのです。

文の意味と語の意味との関係はさらにややこしいものがあります。

文型も他の構造型もさきに見たように、関係の雛形ですが、これに文の構成に用いられた語の意味をはめ込んで得られた結果が文の意味、ということにはなりません。発話の場のコンテクストに照らして、これとの調和・均衡が求められます。前に「読み書きの他には…」の例で見た通りです。

かくして得られた文の意味は、文を構成する語句の意味とつき合わせられ、いわば逆算により配分しうる限りの意味が、語句に割当てられています。しかつめらしい説明を試みればこのようにくどくなりますが、次は諸賢が日常実行しておられるところです。辞書の記載項目がふえる、語句が新規の意味を加えるのもこの過程を経た上でのごとに限るので、ここには例外はありえません。語の意味は用例を通じてのみ培われていくものです。常に参照枠となる意味のNWの存在、文とこれとを引合わせる言語の使い手の良識は言うにや及ぶですけれども、言わずにかえて強く響かせる意味もありえますね。

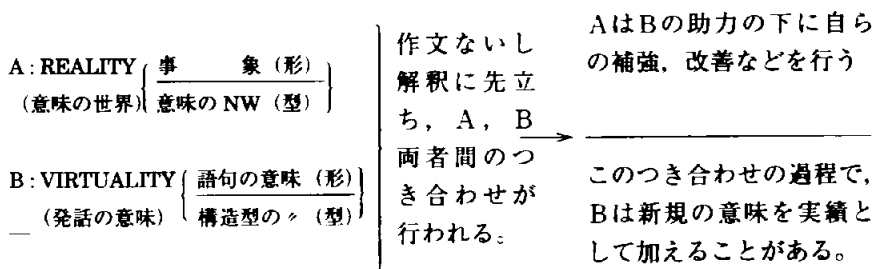
今まで本稿でたどってきた論理の筋道を延長するとこうなるのですが、文の構成に用いられた語句の意味とは一見何の関係もなさそうな意味を文の意味と見なすことについては意見が当然分かれるでしょう。筆者は伏して諸賢の教えを俟つのみです。しかし、「これ何？」と聞かれて「CDだよ」とだけ答えて澄ましていられる人がいるでしょうか。旅行者に「駅への道順、ご存じ？」と聞かれて、「はい、知っています」では、まともな答えにならないように、「CD」の場合にも、「これは…するものなのだ」と一言説明が必要でしょう。修辭的疑問文の場合など、話し手が聞き手から誘い出す反応、予期される答も、平叙文より強調の度が強められた文という解釈が成り立つとすれば、もとの疑問文

の意味のうちに入らないでしょうか。

以上、安井先生の呈示なさる5つの条件に照らして、筆者が辿りついた意味の概念の吟味をご覧頂きました。吟味と言ひ条、反省や批判より自己主張の色合いが強いこと、「意味のNW」や「関係」というキー・ワードにもっと立入った考察ができなかったことが心残りです。しかし正直言って筆者にはこれが精一杯のところなので、こうした考え方に興味を持つ若い世代の方々からの問いかけを、本稿には一切割愛した先哲の遺訓への感謝の念をこめつつ期待するほかありません。

余白を利用して、若干書き添えます。「意味のNW」とは、平たくいえば、私たちが日常、周囲の事物、出来事に対して施している意味の解釈が各人各様に組織化され、秩序立てられるうちにも、社会の成員間同士の心の疎通により共有財産的な趣きを維持している状況のことです。言語の意味というとき、辞書の記載項目、発話によるその組合せとの連想が働き、それから先の拡張解釈は言語外の出来事との通念が一般的ですが、言語と意味のNWとは、本当にこのように間接的な関係にしかないのでしょうか。私たちが言語を通じて行っていることは、各自の意味のNWの補強、充実、改善等々に他ならないのではないのでしょうか。意味のNWと言語との親密な関係について改めて澄んだ眼を凝らす必要はないのでしょうか。

本稿の要目を次のような図式にまとめてみました。



- * AはBの指示対象ではなく、Bに現前し発話による意味の造型に貢献する。
- * BはAの容器、衣装ではなく、Aを代理し、代弁する。
- * 使い手は、その心掛け次第で、発話や文章の意味を糸口として、意味のNWに従い、糸口から導き出せる諸関連を次から次へとたぐれる。
- * 異文化のショックに襲われるのは、母語の意味のNWしか知らない人。逆に異文化の理解が母語の理解を深める機縁となることも、ごく自然の成行。